

新 時 代

第 7 号

昭和42年11月20日

日 本 盲 人 福 祉 研 究 会

(文 月 会)

鳥居篤治郎先生ご推奨

晴盲兼用 男・女盲人用腕・提時計

製作 ・ 販売

小西立志堂時計部

小西健司

京都市河原町四条下ル稲荷町

電話 京都 075(35)5076

振替口座 京都 6301

(住所明確に御申込次第カタログ無料進呈)

点字印刷の革命

点字印刷板

- (1) 大きさ 30ます、12行、片面書き、点字用紙 $\frac{1}{2}$ 判
- (2) 価格 2,000円、目の字板、ローラー、点筆、原紙20枚付
- (3) 使用法 手書きしたものを原版にして、ローラーを転がして
50枚程度の印刷可能、学校、組合で便利
- (4) 材質 硬質塩化ビニール製、原紙はビニール使用

東京都世田谷区喜多見町 3959

お問合せは

弘

誓

社

電話 03(415) 1361 振替口座東京 56377

目 次

巻頭言「盲教育雑感」	大 上 康 雄	1
盲学校高等部の今後	中 林 左 近	2
盲学校高等部の教育はこれでよいか	永 井 昌 彦	5
盲学校高等部における普通科教科について	鈴 木 彪 平	8
盲学校高等部わき見論	入 川 勝 男	11
盲学校高等部教育におもう	西 岡 恒 也	14
第7回例会報告	高 橋 実	18
施策実行委員会報告	茂 木 幹 夫	23
盲学校の後期中等教育はいかにあるべきか	加 藤 守 一	25
盲学校における全盲教育と弱視教育	藤 井 熙 美	29
盲生徒の人生観の考察	勝 川 武	31
曲がり角にきたあんま経営	桂 田 淳 一	42
係からのお願い	高 橋 実	46
編 集 後 記	高 橋 実	48

巻頭言 「盲教育雑感」

兵庫盲教諭 大 上 康 雄

十月ともなれば、さすがに朝夕の冷込みは、来る冬の寒さをしのばせるものがある。しかし日中の日だまりでは小虫が舞い、一文字せせりや、小蝶が花をあさっている。私の向かっている窓ぎわにも子供が飼っている、キリギリスが思い出したように低い鳴き声をたてている。

七月のはじめに夜店で買い求めたこの虫が、今まで生きているのはちょっとした驚異である。一匹きり虫かごに入れておいたので、共食いにあわなかったこともあるが子供たちの世話もよかったのだろう。時折りくれるかつおの粉と砂糖を少々やっているのが長生きさせる秘訣だと四年生になった長男は自慢する。

私はこの話を職員室で同僚にした。なかば自慢でもあったのだ。ところが「そんなかわいいようなことを、もう逃がしてやれよ」と同僚はいうのだ。

私もうかつだった「かわいいそうだから」と言われてみればそうかもしれない。

しかし「逃がしてやれ」では物足りなかった。現在の時点まできて逃がしてやる手はない、むしろ死ぬまで面倒をみてやるべきではないだろうか。私はそう思ったままを話すと、かれも「ふうん」といいながら考えこんでしまった。私にもわからないのだが、虫かごのキリギリスはどちらを望みどちらを選ぶだろう。死ぬことを知らずにかごから出て行く、おそらくそうだろう。もし私なら死ぬことを承知で、きっとそうするにちがいない。ただキリギリスほどの生活力を持たない盲生徒たちには、目にみえる危険を取り除くか避けさせるのが私の立場ではないのだろうか。近ごろ盛んに研修会や指導者講習会が県教委の主催で開かれている。労組は神経をとがらし同僚はスタンドプレーを牽制しあっている。そんな職場でヒューマンリレーションが問題になるのも当然である。全盲研の研究会で発表した一教師は、他人の研究発表を無視するのがあの会の特色だと憤慨していた。

九月末に大阪で第5回特殊教育学会が開かれ、私も各種の研究発表を聞くことができた。それら貴重な研究の何パーセントが最後まで生き残り実用化されるかはともかくとして、学会特有の緊張感は私にも「やる気」を起こさせるに十分なものだった。質問の時間がなかったことや研究発表者と親しく交われなかったのは残念だったが、一方から見ればそれだけ盛会であり、多くの人々が真剣に特殊教育と取り組んでおられることにもなる。私の学校でも今年の文化祭は父兄だけで講堂が一ぱいになった。有りがたいと思う。「どこかで春が息吹いている。」私は心からそう思うのである。(筆者は本会委員)

盲学校高等部の今後

大阪府盲校長 中 林 左 近

○ 時代に即して

特殊教育の振興が叫ばれ、その改善と今後の方向が論ぜられる場合、小中学部の義務制の確立している盲教育においては、当然、その焦点は高等学部のあり方の問題となるであろう。この場合、忘れてならないことは一般教育の動向とその方向である。

今日ほど教育に対する関心の高まっている時代はない。戦後の二十年余を見ても、義務教育9年への延長はいうまでもなく幼稚園の普及、高等学校、大学への進学率の向上等を考えると国民の一般的な教育水準は就学の年数において約2倍近くに向上したといえよう。その上卒業後の職場教育その他社会教育の機会等を考えると一般社会の教育水準は目ざましい向上といわねばならぬ。このことは戦前の盲学校の初等部、中学部、さらに研究科という制度当時の盲教育水準と一般国民の教育水準との差が逆転したと見なければならぬ。

しかも、今日の社会の人間に対する要求は時間内における能率の高さを求める度合が強くなっている。生産社会を中心にこの傾向は人件費の上昇とともに今後ますます強まるであろう。

また、特殊教育の振興は一般普通教育の立場に立てば、教育対象者の質の均等化が行われることであって、教育能率を上げる条件が整ってゆくという結果になるはずである。

これらの点に立って盲教育を考えると、盲人の社会的自立の条件としては決して前途を楽観し、安易にその地歩を保ち得るということにはならない。盲教育がその教育年限の優位性を失い、一般学校の能率的な学習に対応しつつ、能率本位の社会で正常者の中に伍して、その地歩を確保してゆくということは決して容易なことではないからである。

日進月歩は社会の常道であって、その時代に即応して盲人が社会に自立して行くための教育体制をどのように考えるかが今日の課題である。そのためには社会の変遷を的確にとらえて、現在までの盲教育の歩みを省み、今後の方向を決定する要点

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

新 時 代 第 7 号

昭和42年11月15日印刷
(非売品)
昭和42年11月20日発行

発行人 「新時代」編集委員会

発行所 日本盲人福祉研究会

大阪市東淀川区東三国町2~20

振替口座 大阪 27588番